

平成23年度「重点研究費」研究成果報告書

申請区分	C	配分額	530,000 円
研究課題	「東北地方太平洋沖地震で被害を受けた漁村」の現状と支援課題に関する調査		

研究代表者

氏名	水津 嘉克	所属	人文科学講座・地域研究	職名	専任講師
----	-------	----	-------------	----	------

研究分担者

氏名	橋村 修	所属	人文科学講座・地域研究	職名	准教授

【研究成果の概要】 (文字の大きさ9ポイント・字数800字～1600字)

本研究の第一の目的は、今回の震災で甚大な被害を受けた漁村の現状を把握するため、実際に現地に赴き（主な調査地として旭市・飯岡町）、聴き取り調査や視覚的データ（写真などによるデータ）の取得を試みることである。

漁業は日本社会の産業の一翼を担う部分である。その地域が復興していくためには、漁業産業の再生は欠かせない要素となるはずだ。がしかし、民俗学においても社会学においても、これまで漁村・漁業に注目して展開されてきた研究業績は、なかなか蓄積されてこなかった。双方の複眼的視点から被災地を調査することで（すでに多くの研究者が被災地をテーマに調査研究を試みているのとは異なる視点からの）、オリジナルな研究成果が得られるのではないかと考えた。

また、今後の日本のあり方に大きな影響を与えるであろうと考えられる今回の震災に関して、同じ研究室・教室に所属する教員二名が共同でデータを収集することは、教育大学である本大学における今後の教育のなかで重要な成果をもたらすのではないかと考えた。

実際の調査では、最初の目的に書いたとおり橋村と水津が共同で調査に当たった場面もあれば、それぞれ単独でおこなった部分もある。それぞれ調査に行く際、調査から戻った際にはそれぞれ情報を共有し合い、話し合いもおこないつつ進めた。しかし、一年（実質的には半年）という期間は、双方が得たデータを検討し相互に議論を進めるにはあまりにも短すぎたというのが正直なところである。分野をこえ、研究を進めていくにはまだ多くの時間が必要であることを痛感させられた。

当初の目的として掲げたなかで、ある程度達成できたものがあるとなれば、被災地として見過ごされがちな千葉県旭市・飯岡町の被害の実態を早い時期から記録することができたこと、また実際に学芸大学の学生を被災した現場に連れて行き、被災した方の生のお話を聞くことにより彼らにマスコミから伝わるのとは異なる被災地の現実を体験してもらうことができた点であろう。

しかし、その一方で毎回橋村と水津が話し合っていたのは、数回の現地調査のみで報告にまとめていくことがあきらかに困難な被災地の現実である。これはわれわれの力不足、それから先にも書いた時間不足による点も同時に、これからも継続して調査を進めていくなかで考えていく大きな課題であるということができよう。

研究成果発表方法

研究成果報告書

『「東北地方太平洋沖地震で被害を受けた漁村」の現状と支援課題に関する調査』を、橋村・水津共同で作成した。